

第 1 章

研究の概要

『第 1 章 研究の概要』をお読み頂く前に

- 本校のキャリア教育について、簡潔に知って頂くには…



執筆した文章は、できるだけ「図・表」にまとめています。
まずは、タイトルと「図・表」を見て頂けると、おおよその内容
が分かると思います。

- 本校のキャリア教育について、背景や根拠を含めて知って頂くには…



「図や表」と合わせて、ぜひ文章をお読み下さい。

I 研究概要

研究テーマ

自分の力を発揮し、生き生きとした姿をめざすキャリア教育の実践
～子どもの将来を見据えた指導を求めて～（2年次／3年研究）

1 研究テーマ設定の理由

1-1 小・中・高一貫した教育をめざして

本校の教育課程の特徴は、生活単元学習をはじめとする、教科・領域を合わせた体験的な学習を中心に、児童・生徒の自立に向けて取り組んできた。

本校の課題について調査したところ、「小・中・高の学習内容のつながり・指導の一貫性」という意見が最も多い回答であった。また、教員と保護者に実施した調査では「小・中・高一貫した教育」が課題として取り上げられた。文部科学省の手引き（平成18年度）には、「キャリア教育には、小学校・中学校・高等学校を通じて一貫した教育活動として発展的に取り組まれることが期待されることから、小学校から中学校へ、中学校から高等学校へと段階的・漸次的な能力や態度の育成が求められる。」とあり、キャリア教育の推進は本校の課題解決に直接結びつくと言える。（図1）

この課題に取り組むべく、平成22年度より3年間『知的障害のある児童生徒へのキャリア教育の在り方～児童生徒の「自己実現」をめざす取り組み～』（以下、前研究）をテーマに、一人一人に応じたキャリア教育の在り方についての研究を行ってきた。その後、前研究の成果を活かし、実践面などの充実をねらい、平成25年度より『自分の力を発揮し、生き生きとした姿をめざすキャリア教育の実践～子どもの将来を見据えた指導を求めて～』（以下現研究）の研究テーマを設定した。この研究は3年計画で行い、今年はその2年目にあたる。

以下、本研究のテーマ設定の理由を「1-2 前研究について」「1-3 昨年度の取り組みについて」「1-4 これまでの経緯を踏まえた今年度の方向性について」「1-5 主体性とキャリア教育について」から説明していく。

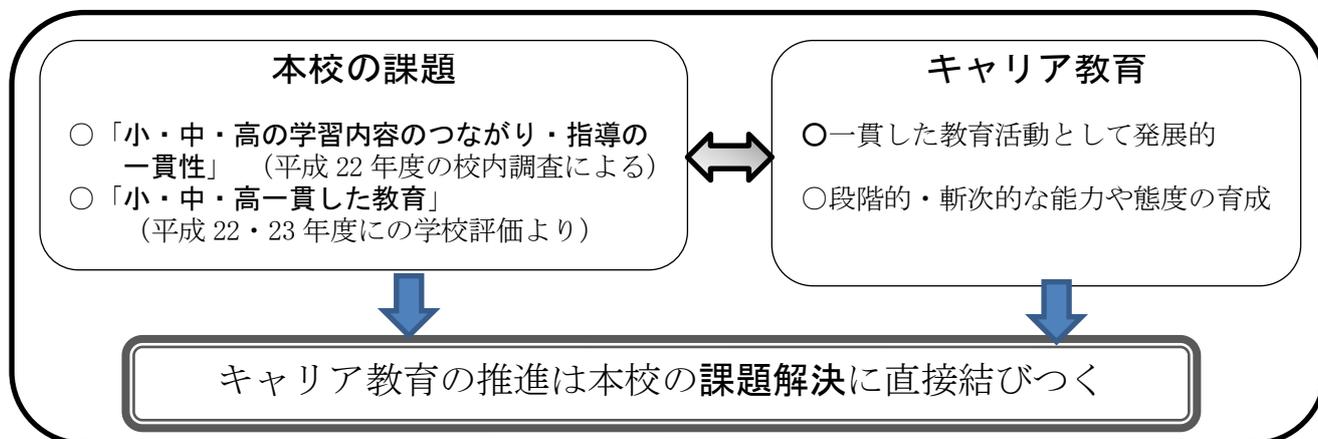


図1 本校の課題とキャリア教育

1-2 前研究について

(1) 前研究の研究概要について

前研究では、本校の課題である「小・中・高一貫性、系統性のある一人一人に応じたキャリア教育の在り方のモデル」をめざし、研究に取り組んだ。研究目的と研究仮説を以下のように設定した。

○ 研究目的

本人及び保護者の願いを基に児童生徒の自己実現に向けた将来像を作成することを通して、知的障害のある児童生徒に対する、一人一人に応じた、一貫性・系統性のあるキャリア教育の在り方のモデルを示す。

○ 研究仮説

児童生徒が卒業後に過ごす場は、主に「家庭」「職場」「余暇の場」の3か所である。本人及び保護者の願いを基に児童生徒の3つの場における将来像を作成することができれば、児童生徒の自己実現にむかう取り組みを、一人一人に応じて、一貫性・系統性をもって行うことができる。

このように前研究では、児童生徒一人一人に応じた、一貫性・系統性のあるキャリア教育をめざし、一人一人に**将来像**を作成する取り組みを行うこととした。この将来像を作成するうえで、先行研究の一つである Super (1986) による研究を参考に (図2)、本研究では障害のある児童生徒が学校卒業後に過ごす生活の場は、大きく「家庭・職場・余暇の場」の3つの場に分けられると考えた。

そして、**将来像**を下記の通りに定義し、各発達段階に対して将来像に関する役割を設定した。

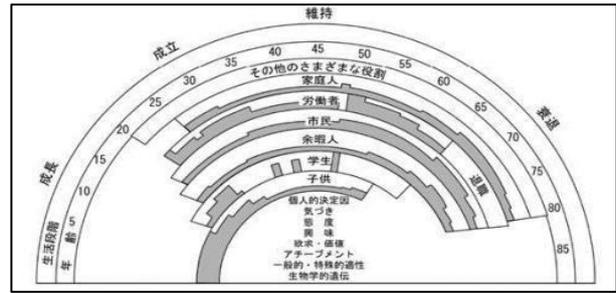


図2 「ライフキャリアの虹」(Super 1986)

(生誕から死去までの、ある男性の役割を概念図化している)

○ 将来像の定義

将来像は、自己実現をしている生活を想定した、児童生徒の23~25歳時の姿である。

小学部段階では、働く生活を開始するまでに長い年月があるため、「将来の生活を描き始める時期」と位置付け、将来像の「設定」に焦点を当てた。次に、中学部段階では、小中高の12年間の学校生活が後半に入る段階であることを踏まえ、「将来の生活について考えを深めていく時期」と位置付け、将来像の「具体化」をめざして実践を行った。高等部段階では、学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であり、「卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期」であることから、将来像の「現実化」をめざして実践を行った。(図3)

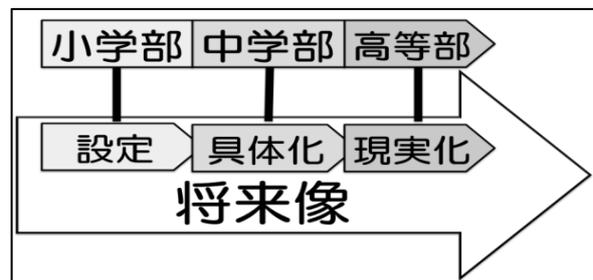


図3 各学部の将来像に関する役割

この将来像の取り組みを軸にし、各学部の生活年齢による時期の特徴を押さえ、学部間における系統性のある取り組みをめざして、それぞれの学部における「将来像作成の観点」を検討し、以下表1に定めた。

表1 各学部の将来像作成の観点

	小学部	中学部	高等部
将来像作成の観点	将来像の設定	将来像の具体化	将来像の現実化
	 ○将来につなげたいよさ	 ○行動の基となる能力 ○支援の方法と程度	 ○場面 ○かかわり ○実態 ○金銭収支 ○社会状況

このように将来像を軸にし、各学部の生活年齢による時期の特徴を押さえ、学部間における系統性のある取り組みをめざして、今までの指導を見つめ直し、「キャリア教育のモデルを示す」ことに向けて取り組んだ。

(2) 前研究の成果について

前研究の取り組みを通して、様々な成果を見いだすことができた。主な成果を以下の4点により示す。

① 一貫性のあるキャリア教育のモデル

将来像の定義や考え方を基に「自分の力を最大限発揮し、生き生きと生活している姿」(自己実現)を見据え、小中高のどの児童生徒にも、一貫して将来像を軸とした取り組みを行うことができた。

② 系統性のあるキャリア教育のモデル

「将来像作成の観点」(表1)を通じて、小学部の「将来につなげたいよさ」が中学部の「行動の基となる能力」につながり、高等部の5つの観点へとつながり、発展していく系統性が見えてきた。

③ 将来像を軸とする共通理解の深まり

将来像を軸にした取り組みの中で、将来を見据えた視点で児童生徒を共通理解し、共通支援に向かう仕組みを構築することができた。

④ 「生き生きとした姿」の重要性の確認

各学部の研究報告では、「生き生きとした姿」をめざした実践報告や、実際の授業において

生き生きとした姿から将来像作成の観点を導き出す取り組みが示された。

このような成果が出され、前研究の取り組みを通して、自己実現に向かうために、今を「生き生き」と過ごすことが将来の「生き生き」へとつながることの大切さを確認することができた。

幅広い実態の児童生徒一人一人にせまる特別支援教育において、学校や学部の教員間で共通理解を図り、共通の支援をしていくことは、教育的効果を上げるにあたり欠かせない要素であろう。3年間の取り組みを経て、「将来像」及び「将来像作成の観点」という将来を見据えた共通の視点で児童生徒を共通理解し、共通支援にむかう仕組みを構築することができたことは、本研究の成果であると考えている。(図4)

(3) 前研究の課題について

多くの成果を得ることができた一方で、検討すべき課題も見えた。課題を以下の5点にまとめる。

- ① より一貫性のある授業実践
- ② 各学部段階の実態把握についての整理
- ③ 学部間の将来像の引き継ぎ方法の確立
- ④ アンケート調査の分析結果の活用
- ⑤ 将来像の「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の位置づけ

このような課題が出されたが、実践を積み

重ねていくことで解決していく課題が多くあり、今後の研究の在り方を聞いた教員へのアンケート調査からも「前研究を引き続き深め

ていきたい」「実践中心の取り組みを行いたい」という意見が多く出された。

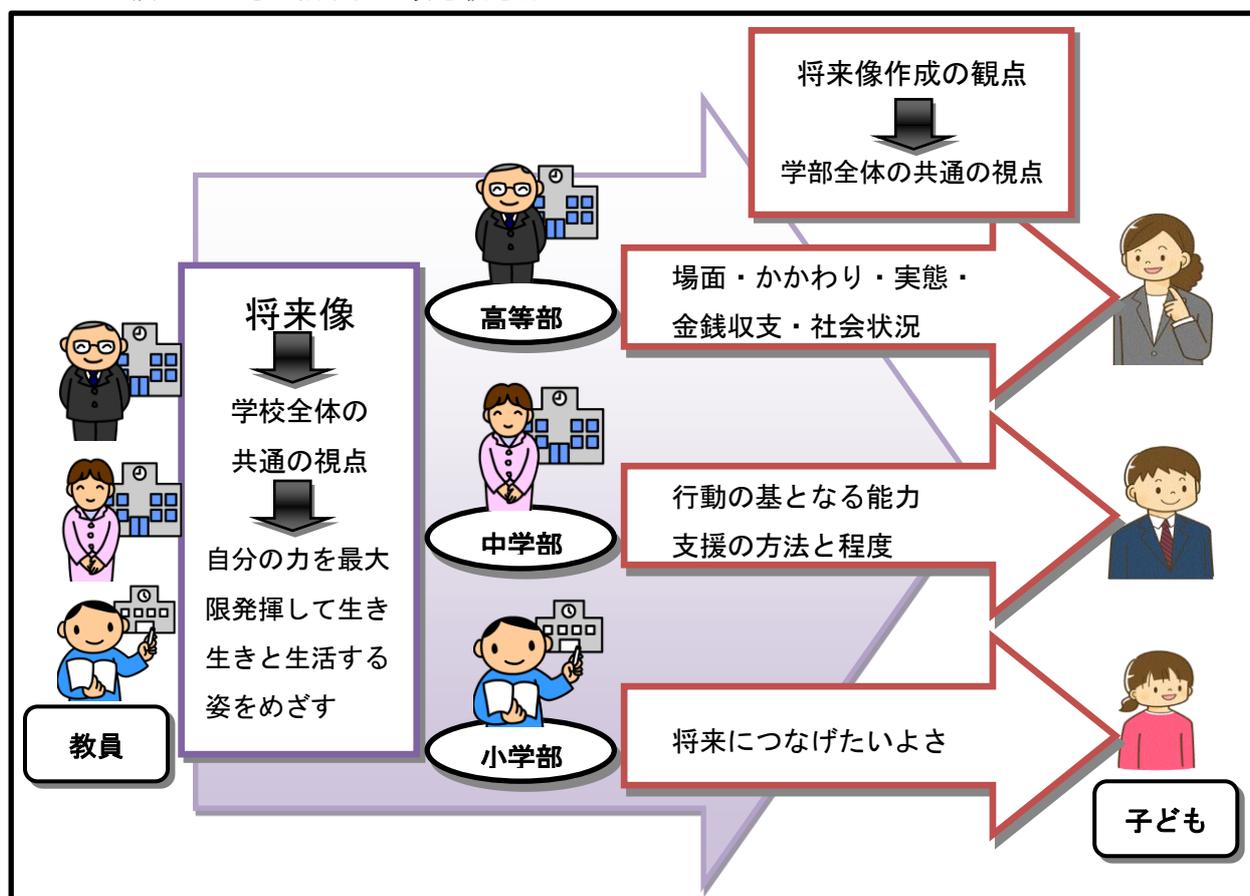


図4 軸となる共通の視点による共通理解の深まり

(4) 前研究の課題について

多くの成果を得ることができた一方で、検討すべき課題も見えた。課題を以下の5点にまとめる。

- ⑥ より一貫性のある授業実践
- ⑦ 各学部段階の実態把握についての整理
- ⑧ 学部間の将来像の引き継ぎ方法の確立
- ⑨ アンケート調査の分析結果の活用
- ⑩ 将来像の「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の位置づけ

このような課題が出されたが、実践を積み重ねていくことで解決していく課題が多くあり、今後の研究の在り方を聞いた教員へのアンケート調査からも「前研究を引き続き深め

ていきたい」「実践中心の取り組みを行いたい」という意見が多く出された。

1-3 昨年度の研究について

(1) 昨年度の研究概要について

前研究の中で、自己実現に向かうために、今を「生き生き」と過ごすことが、将来の「生き生き」とつながることの大切さを確認した。そこで、現在行っている授業をキャリア教育の視点で見つめ直し、より「生き生き」した姿をめざす授業実践を行う、実践中心の研究に取り組むこととした。

○ 研究目的

前研究の成果を活かしながら、一人一人の子どもが生き生きと学習に取り組むことをめざし、キャリア教育の視点から授業のさらなる改善をはかる。

この研究目的の「キャリア教育の視点」は現在取り組んでいる教育活動が児童・生徒にあったものになっているか、現在行われている指導や支援が将来の生活において、どのような意味があるかを考えるための視点である。この研究目的を達成するためには、この視点を教員全員が共通してもつことが大切であり、そのためには、各学部や学年間の取り組みについて理解を深めていく必要があると考えた。そこで、将来像を軸とした取り組みの中で、各学部あるいは個々の教員が何を大切に考え、どう取り組んでいるのかを、集録作成や研究発表、授業研究会を通して、お互いが理解し合える実践中心の研究に取り組んだ。具体的には、集録作成では研究テーマにそった、学部や教員からの困り感から個人研究テーマを教員全員が設定した。このテーマにそって教員個々が実践を積み重ね、学部内や全校での授業研究会で、多くの目を通すことで、実践の改善が進み、お互いの理解が進むよう研究を行った。

(2) 昨年度の研究の成果について

このように行った個人の研究から以下のような成果や共通した取り組みが見られた。

① 的確な実態把握と手だての実施

各学部の実践では、前年度までに検討が進められてきた、将来の姿を見据えた児童生徒を見取るキャリア教育の視点から、的確な実態把握と場の設定が行われた。

② 主体性に注目した取り組み

個人研究では、学部を問わず結果や考察部分において「意欲的に」「向き合う姿勢」「自

分から」など、主体性に関することをキーワードとして述べている報告が多くあった。

このように主体性に注目することにより、児童生徒が自ら進んで活動に取り組み、成功体験を積み重ねていく姿が多く見られるようになった。

③ 生活年齢に応じた自己肯定感を高める取り組み

現在の児童生徒の能力を發揮して、活動の中で活躍させることで、自己肯定感を高めていこうとする点では、それぞれの学部で一致していた。個に応じて、児童生徒が力を發揮して成功体験を積み重ねていくために、実践の工夫がなされていた。

(3) 昨年度の研究の課題について

前年度の研究の課題について、以下の3点が挙げられた。

① 他学部の教育課程への理解の深まり

各学部の実践報告を通して、お互いの理解が深まり始めたところであり、今後も継続して取り組んでいくことや、他学部との意見交換を日常的に行えるような環境づくりなど、他学部への理解が進み、将来像を軸としたつながりがより強固なものになるよう取り組んでいく。

② 学部間の研究成果の共有化

各学部で進めてきた結果、将来像作成への観点などで色々な言葉が使われており、学部をまたいで引き継ぎ時に大きな障害となっている。どの学部もそれぞれの言葉について定義づけや、意味づけが行われているが、それぞれの言葉の同じ部分や異なっているところを整理し、言葉を共通化していくまでは至っていない。

③ 将来像の教育課程への位置づけ

現在将来像の引き継ぎに関しては学校の教育課程の中の書式として組み込むことを検討

しており、他分掌と連携して、改善点を整理しながら、教員個々の実践に活かされるものにしていく。今後、将来像を考えるプロセスが、児童生徒の目標や手だてに活かされるよう、本校の教育課程におけるPDCAサイクルの中に位置づけていくことを検討していく。

1-4 経緯を踏まえた今年度の方向性について

前研究では、一人一人の児童生徒に応じた、自己実現をめざしたキャリア教育のモデルを示す取り組みを行った。この取り組みで、将来像を軸とした小中高の一貫性・系統性のある仕組みをつくることができ、現在の一人一人に応じた、将来を見据えた教育の実現の土台を構築することができた。

この研究を土台として、今の「生き生き」が将来の「生き生き」へとつながり、自己実現へとつながると考え、昨年度の研究では「生き生き」と授業に取り組むために、キャリア教育の視点で、授業のさらなる改善を図ることを目的として、実践中心の研究を行った。

そして、今年度は「生き生き」をめざすうえで多くの実践報告で挙げた大切な視点として、自分から取り組む姿勢、いわゆる主体性を高めていくことが現在の「生き生き」した姿につながっていくと考えた。そこで主体

性を高めていくことに注目して、実践を行っていく。

1-5 主体性とキャリア教育について

平成23年1月に出された「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）」では、キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」重要性について示された。「基礎的・汎用的能力」の具体的内容については、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理された。この4つの能力と主体性の関係を見てみると「人間関係形成・社会形成能力」では「今後の社会を積極的に形成することができる力」「自己理解・自己管理能力」では「主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」「課題対応能力」では具体的な要素のれいとして「実行力」が触れられている。「キャリアプランニング能力」では「自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力」とあり、4つの能力に主体性に関する明記がされており、キャリア教育において主体性が重要視されるべきものであると考えられる。

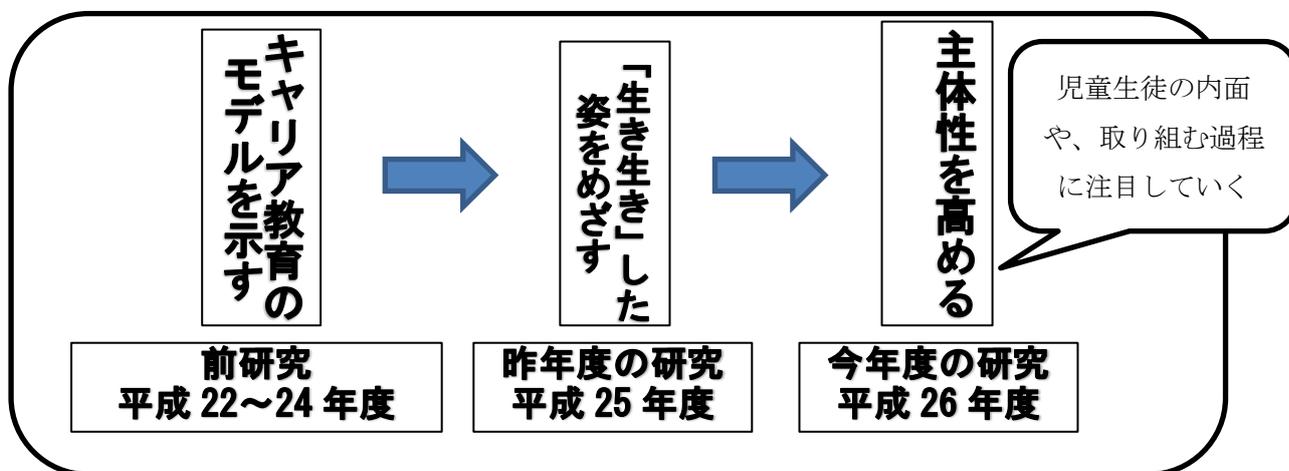


図5 研究目的の変化

2 研究目的・研究方法

2-1 研究目的・研究仮説

本研究では、児童・生徒の自己実現をめざし、キャリア教育の視点で、現在をより「生き生き」した姿になるよう、教育活動を見つめ直していく。そのために、前研究の成果を

活かし、「生き生き」をより具体的にとらえた「主体性」を高めていく教育活動を行っていき、キャリア教育の視点でさらなる教育活動の改善が図れると考え、以下の通りに研究目的と研究仮説を設定した。

研究目的

キャリア教育の視点（前研究の取り組み）※1を活かしながら、一人一人の子どもが生き生きと学習に取り組むことをめざし、教育活動のさらなる改善を図る。

※1 キャリア教育の視点は現在取り組んでいる教育活動が児童・生徒にあったものになっているか、現在行われている指導や支援が将来の生活において、どのような意味があるかを考えるための視点ととらえている。

研究仮説

「キャリア教育の視点を活かして授業などの実践をすることで、児童生徒の主体性を高められるのではないか。」

2-2 研究方法

研究方法について以下述べていく。

(1) 実践レポートの作成と活用

今年度は昨年度までの研究成果と課題を踏まえ、「生き生き」と学習に取り組む姿を、児童生徒一人一人の主体性を高めていくことで得られると仮定した。この研究仮説に基づき、各部と教員全員のテーマ設定を、主体性を高めていくことに着目し、全教員が実践レポートを作成する。

実践レポートの内容は「研究目的」「テーマ設定の理由」「研究方法」「実践報告」「成果と課題」から構成される。「研究方法」では主体性を高めていくための指導や支援の工夫を中心に記載する。「実践報告」では指導の実際を記載するとともに、児童生徒の変容についても記載していく。「成果と課題」では指導や支援の工夫が主体性を高めるのに有効であった点を成果とし、うまく改善が図られなかった点や、もっと有効な手だてなどさらなる改善

方法について記載していく。

この作成した実践レポートを教員全体で共有していくことで、教育活動のさらなる改善を図れるものと期待する。

(2) 授業研究会の実施

小中高の一貫性・系統性のある教育活動の実現には、各学部間あるいは教員間の、教育活動への取り組む姿勢や意図などを理解し合う必要がある。また、本研究のポイントとなる主体性は、児童生徒の内面的なものであり、どのように見取り、評価することは大変難しいと考えている。

そこで、妥当性を高めていくために、多くの目で研究の方法や成果を確認するようにした。具体的には、お互いで実践を見合い、理解し合える場として、学部内や全校での授業研究会を設定した。また、研修会や研究協議会など、学校外からの意見も取り入れていくよう、協議の場などを工夫して実施していく。

(3) 実践の共有化

教員全員で実施した実践から、それぞれの考えや手だての工夫が多く発表されることが予想される。この実践の内容を、学校全体で共有することで、より「主体性」を高めるための児童生徒に合った手だての工夫ができ、研究目的である「教育活動のさらなる改善」に迫ることができると考える。また、実践から「主体性」をどのように見取ったかを具現化していくことで、「主体性」の見取りの共通点を考察していく。そうすることで、児童、生徒の内面や、学習に取り組む姿勢や過程をより大事に評価できるようになると考える。

(4) 評価の方法

本研究は研究目的である教育活動のさらなる改善が図れたかを見るために主体性の高まりで見取っていく。主体性の高まりを見取することは児童・生徒の内面部分であり、直接見取することはできないと考える。しかし、私たち教員は児童・生徒の行動から内面の変化を察知し、教育活動に活かし、評価を行ってきている。

そこで、主体性の高まりを児童生徒の変化の様子や、行動の変化から見取り、評価していく。また、良い結果が得られなかった場合にはその理由についても考察し、改善案を提示していく。

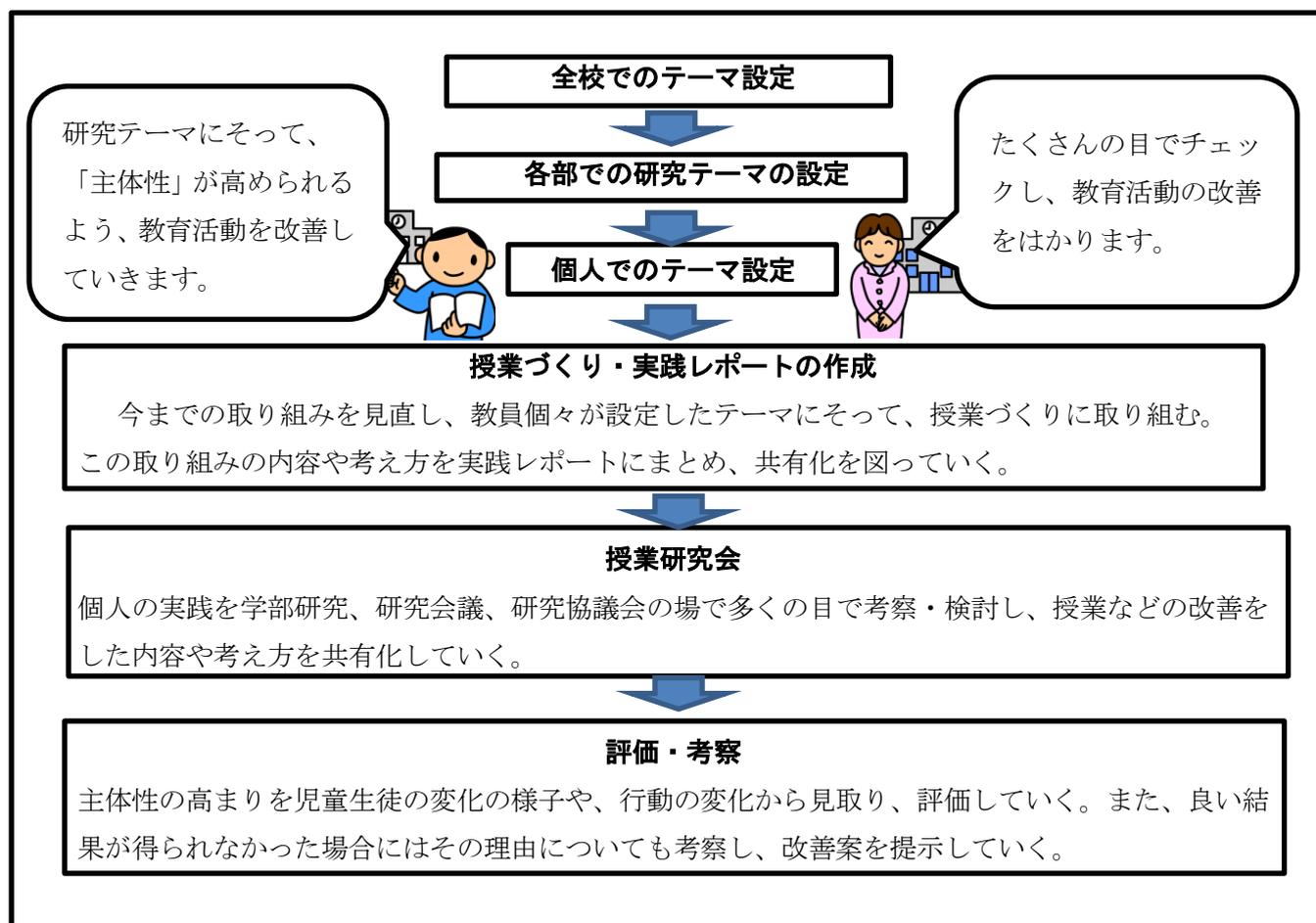


図6 基本的な研究のながれ（研究方法）

3 研究計画

3-1 3年間を見通した研究計画

前途の研究目的を達成するために、本研究は3年計画で取り組んでいる。今年度は2年目にあたり、1年目同様に実践を中心に据えて研究を進めていく。昨年度の研究を踏まえ、「生き生き」をより具体化する形で、本年度は「主体性」に注目して、教育活動のさらなる改善をはかっていく。そして3年目は、2年間積み重ねられた、児童生徒の「生

き生き」した姿を導く実践を整理していく。その中で、個々の実践の中で見られた、キャリア教育の視点での取り組みの共通点を整理していく。これによって、個々に応じた一貫性・系統性のあるキャリア教育の取り組みを行い、実践力の向上、授業改善が行えるようにしていく。そして、各学部間・教員間の考えを共有化していき、小中高の一貫性・系統性のある教育活動を実現していく。

平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
テーマにそって事例的に個人テーマを設定し、全校や学部の授業研究会を通して、実践力の向上を図っていく。	テーマにそって「主体性」に注目して、個人テーマを設定し、全校や学部の授業研究会を通して、実践力の向上を図っていく。	2年間の実践研究の成果を発揮し、各学部、教員間での考えの共有化を図り、小中高の一貫性・系統性のある教育活動を実現していく。

3-2 平成 26 年度（2年次）の経過及び計画

月	研究に関する主な活動
4	研究会議：平成 26 年度の研究の進め方の確認、決定 実践研究の開始
7	研究会議：第 1 回授業研究会
8	研究会議：第 2 回授業研究会
9	校内研修：渡邊昭宏氏 元神奈川県立金沢養護学校副校長 「みんなのライフキャリア教育」 ～仕事力+暮らす力・楽しむ力で生きる力に～
12	研究会議：第 4 回授業研究会 研究協議会に向けての確認
2	第 43 回特別支援教育研究協議会開催 「研究集録第 42 号」発行及び配付
3	研究会議：今年度の研究のまとめと来年度の方向性